

## ご挨拶のことから

守安 収

セレモニーでのご挨拶は日常的な仕事のうち。でも、この5月から6月初めにかけての多さには正直恐れ入りました。展覧会や関係団体の主催者・来賓挨拶から永久幹事を務める中学3年のクラス会まで、何でもどうぞでした。それもちょっと一段落する見込みで、ほっと一息。▼さて、6月17日には九州国立博物館島谷弘幸館長による講演会「時代と共に-変貌する博物館-」に続くパネルディスカッション「岡山県の博物館・美術館の今と未来」に林原美術館、夢二郷土美術館の面々と一緒に登壇します。わが館の未来図をどのように描くかは大問題です。施設設備の老朽化、来館者数の減少、収集予算・展覧会経費・学芸員の確保といったことは業界共通の課題であり、殊に地方公立館は危機的状態にあります。私どもも同様です。しかし、お金でしか解決できない事柄のほかは、私は楽観視しています。良質の「岡山の美術」を収集と常設展示の柱に据え、県民の附託に応える丁寧な仕事の継続によってのみ獲得し得る信頼感をもってすれば現在の難局を乗り越えることができると考えます。併せてより良いサービスを提供するという気構えも必要ですが、その点は館員もボランティアも指定管理者も信頼に値します。先般、「学芸員はガン」という発言がありました。今どき文化財や美術品の活用と保全の両面を考えない学芸員などみたくありません。館は次世代へ、未来へ伝える重大な責務を担っていることを肝に銘じつつサービス業に励みます。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
http://okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00-17:00 (入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

## 編集後記

大山真季

美術館ニュース117号をお届けします。今号では「世界名作劇場展」関連イベントとして開催した美術館講座について、部分的なまとめを掲載しています。広い世代に親しまれているアニメーションを足がかりとすることで、難しく捉えられがちなキリスト教絵画の様式について学芸員がわかりやすく解説しました。会期中は海外のお客様にも多くご来館頂き、日本のアニメーションに対する人気を実感しましたが、次回特別展では、ジャポニスムに代表されるように海外にも大きな影響を与えた浮世絵の傑作を一堂に展覧します。今もなお国内外の人々を惹き付ける浮世絵の魅力をぜひその目でご堪能下さい。

## 「美術館の紹介」vol.17

外壁の万成石の柱とタイル壁の接点になる柱頭は、山を想起させる三角形をモチーフとしてデザインされた。ここから三角形は全館へと拡大し、当館の特徴的なデザインとしてあちこちに取り入れられている。



# カール・ラーションと浮世絵

石田 すみれ(学芸員)



図1: 歌川広重《東海道五十三次之内 日本橋 朝之景》

(公財)平木浮世絵財団

図2: スウェーデン中部ダーラナ地方のスンドボーンにあるカール・ラーション記念館、2階の書斎

Michael Snodin, Elisabet Hidemark, Carl and Karin Larsson: *Creators of the Swedish Style*, Bulfinch Press, 1997より転載



2

夏の特別展「傑作 浮世絵 揃い踏み—平木コレクション」では、日本有数の浮世絵コレクションから、選りすぐりの約200点を出品する。歌川広重の代表作である「東海道五十三次」(図1)シリーズの初摺全点のほか、江戸時代から近代にいたるまでの浮世絵版画の名品の数々を、岡山で一望できる貴重な機会である。

「浮世絵」といえば、何を思い浮かべるだろうか。身近なところでは、蕎麦屋や居酒屋などの飲食店に飾られていたことや、復刻したお茶漬けのおまけのことなどを思い出すのだが、とりわけ学生時代に研究したスウェーデンの画家、カール・ラーション(Carl Olof Larsson, 1853-1919)のことが、私の頭から離れない。何故ここで北欧の画家が出てくるのか。それは、彼が日本美術に関心を持ち、浮世絵版画の影響を受けたとされる画家だからである。

19世紀末、ヨーロッパには浮世絵を含む日本の様々な文物がもたらされ、パリを中心に「ジャポニスム」と呼ばれる空前の日本ブームが巻き起こった。日本のものが愛好されるにとどまらず、ドガやゴッホといったフランスの画家たちが浮世絵の影響を受け、従来のアカデミックな絵画と異なる作品を生み出したことは広く知られている。そして日本美術の影響は、フランスのみならず、北欧諸国にも及んでいた。ちょうどゴッホと同じ年に生まれたラーションは、1895年に出版された画集『わたしの家族 (De Mina)』で「日本は芸術家としての私の祖国である」という非常に興味深い言葉を残している。

ラーションがこの印象深い言葉を記すきっかけとなったのは、一体何だったのだろうか。現在、カール・ラーション記念館として一般公開されている自宅兼アトリエには、ラーションが生前に集めていた絵画や工芸品が残されている。昨年3月、スウェーデンにあるこの記念館を訪れた私は、花瓶に立て掛けられた団扇や、おかめのお面、丁髷と日本髪を結った2体の日本人形、さらには地藏菩薩にいたる蒐集品を間近で見ることができた。なかでも書斎(図2)には、額に納められた写楽と思われる大首絵が掛けられており、天井には32枚の錦絵が飾られていた。左右それぞれ16枚ずつ、天井の長方形に作られたくぼみの部分に、すきまなくぴったりと納められていた。

所持していた浮世絵から何らか着想を得ていたのだろうか。ラーションの作品には、錦絵にみられる輪郭線や版木によって作り出される平面的な色彩と共通する要素がある。1890年代、ラーションは自身の家族が繰り広げる日常生活を題材に、《ザリガニ捕り》(図3)など水彩画の連作を描きはじめたが、それらの作品には、描かれた対象全てに区別なく描きこまれた黒い輪郭線や、均一な色面の表現

がみられる。版画ではないため全く同じだとは言いがたいが、錦絵の特徴と類似している。

日本の工芸品を集め、日本について印象深い言葉を残したラーションだが、日本美術について具体的な作品を取り上げて語ってはいない。いつどのような経緯で、彼が現在は記念館に保管されているものを手に入れたのか明らかではない。一説には、ラーションは1877年からパリで制作を行い、1880年代には、パリ郊外のグレー＝シュル＝ロワンに滞在しており、この頃に何らかの形で日本美術に触れる機会があったと考えられている。

また文章では語っていないものの、作品のなかに日本美術に対するラーションの思想が示されているようだ。1888年から翌年にかけて描かれた《今日の美術》(図4)と題された油彩画は、個人の邸宅を飾るために依頼を受けた3枚の壁画のうちの一つとして制作された。美術の歴史というテーマの下に《ロココ》、《ルネサンス》、《今日の美術》を題材として選んだラーションは、1889年の第4回パリ万国博覧会に出品することを目標としてパリに赴き、制作に取り組んだ。《今日の美術》の背景には、建設途中のエッフェル塔が描かれている。画面左には、燦々と陽光が降り注ぐなか、イーゼルを立てて制作に取りかかる西洋人の画家がおり、その奥には、丁髷に着物姿の人物が細い筆を手何かを描いている。日本の絵師を表わしているのだろう。ラーションが、当時の流行を描きいれようとした可能性もあるが、イーゼルを前にした画家の奥にこの人物を配することで、当時の西洋美術の背後に日本美術という存在があるということ、つまり影響を受けたのだということを暗示しているとも考えられないだろうか。熱心にイーゼルに向かう画家は、ラーション自身の姿かもしれない。

念願叶って、ラーション記念館を訪れた私であったが、一つ悔やんだことがある。有名な絵師の作品はともかく、浮世絵版画について知らなさすぎると痛感したのだ。私が当時わかったのは写楽だけだった。海外でもいまだに根強い人気を誇る浮世絵だが、果たしてどのくらい我々日本人の身近にあるのだろうか。現在、夏の特別展に向けて準備を進めているが、会期終了後、あの錦絵の飾られた書斎を再度訪れることができたなら、新たな気づきを見いだせるのではないかと密かに思っている。

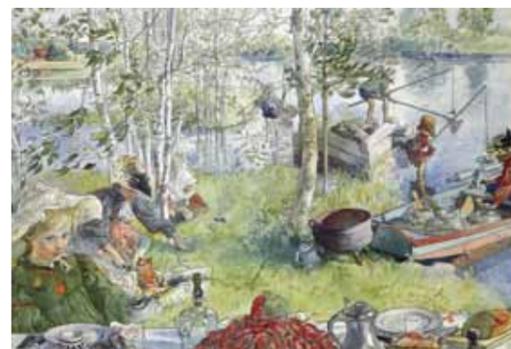


図3: カール・ラーション《ザリガニ捕り》1890-1899年頃  
スウェーデン国立美術館  
東京都庭園美術館ほか『スウェーデンの国民画家 カール・ラーション展』1994より転載

図4: カール・ラーション《今日の美術》1888-1889年  
イエーテボリ美術館

Gabriel P. Weisberg, Anna-Maria von Bonsdorff & Hanne Selkokari. *Japanomania in the Nordic Countries, 1875-1918*, Ateneum, 2016より転載



4

【特別展】「傑作 浮世絵 揃い踏み—平木コレクション」(会期: 2017年7月14日-8月27日)

会場: 地下1階展示室 観覧料: 一般1200円、65歳以上1000円、高大生700円、小中学生400円

## 「金谷哲郎・金谷朱尾子作品選」展覧会の舞台裏

中村 麻里子(学芸課長)

金属や石など、硬い素材を加工して構成した作品を作る父哲郎氏と、哲郎氏の長女で日本画家の朱尾子氏<sup>におこ</sup>、2人の作品展の発案から実現までには時間があまり無かった。前館長であった鍵岡正謹顧問は、哲郎氏の他にはない個性的な創作活動に興味を持ち、「岡山の美術コーナーの中で彼の彫刻作品を紹介すべき」と筆者に言った。

一方筆者は、朱尾子氏の日本画を20代の時に見る機会を得て、当時その強さに圧倒された。28歳で日展特選を受賞した直後のことで、まさに絶頂期の彼女は日本画家としての誇りに満ち、とても輝いて見えた。しかしその後風の噂で所属していた青塔社を退会したと聞き、また日展会場で彼女の作品を見ることは少なくなった。平成8(1996)年日展会場で《この荒寥の春に》を偶然見たとき、あまりに淋しそうな画面に痛々しさを感じた。平成16(2004)年、51歳の若さで亡くなり、2年後に岡山県天神山文化プラザにて「金谷朱尾子日本画展」開催、その翌年岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料室で創立133周年記念特別展「金谷朱尾子遺作展」、さらにその翌年笠岡市立竹喬美術館で「彩艶 金谷朱尾子—うつろう心」展が開催されるなど、遺作を一堂で紹介する顕彰活動が続いた。

数年前、鍵岡顧問と「2人の作品を、同じ会場に並べたらおもしろいんじゃないかな」と漠然と話していたが、昨年度中旬頃から次年度予定展覧会スケジュールに組み込まれるようになり、実現の可能性が開いた。しかしその矢先の今年1月10日、哲郎氏は肋骨骨折のため入院、しかも呼吸不全が長引いて、退院されたのは5月9日、展覧会オープンのおよそ2週間前だった。

何度か入院中の病室に行き、聞き取り調査や雑談をさせていただくうちに目に見えて元気になられたが、御年93歳、さすがに4か月間の入院と展覧会前の大事な時期の負傷ということで、当初は落ち込まれたようだ。私には弱気な発言を一切されなかったが、後で聞いた話では「本気で展覧会をあきらめようと思った」とのこと。野外アトリエのある万成石採石場の浮田石材店社長や、彫刻家の仲間たちから惜しみない後押しと作家に替わっての作品輸送など、たくさん力をもらったという。オープン当日の5月24日、10時からの哲郎氏トーク・イベントには100人近くの人々が集まり、哲郎氏の一言一言を熱心に聞かれた。

さて、鑑賞者の方々は、2人の作品を同じ会場でご覧になって、どう感じられただろうか。「血を分けた2人だから、お互いをリスペクトする気持ちが高いし、共通する特徴もあるから調和している」のか、「個性の強い2人だから、反発し合って刺激的な空間になっている」のか。哲郎氏自身は、「朱尾子にお父さんと2人展をやりたいと言われた時は、まだあまり興味が無く、生前は果たせないままで終わってしまった。今こうして2人展を天国で見て、朱尾子も喜んでいるだろう」と語る。スケールの大きな抽象彫刻から、鳥や牛などをモチーフにしたかわいらしいものまで多彩な哲郎氏の彫刻と、的確なデッサン力をベースに内面性を強く表出した朱尾子氏の日本画。2つの強烈な個性が、時にぶつかり合いながらも、美しく響き合っていると筆者は思っている。



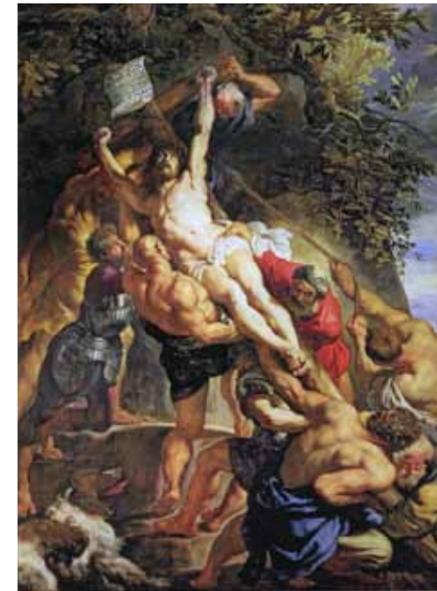
「金谷哲郎・金谷朱尾子 作品選」展示風景



展覧会看板を背に写る金谷哲郎氏

## アニメ「フランダースの犬」のラストシーンにみる受難と救済の含意

橋村 直樹(学芸員)



1



2

図1:ルーベンス《十字架昇架》アントワープ大聖堂/図2:ルーベンス《十字架降架》アントワープ大聖堂  
両図とも『世界美術大全集 第17巻 バロック2』(小学館、1995年)より転載

「フランダースの犬」や「あらいぐまラスカル」などの名作アニメを生み出した制作スタジオである「日本アニメーション」の設立40周年を記念した特別展「THE 世界名作劇場展～制作スタジオ・日本アニメーション 40年のしごと～」が今春当館で開催された。私は、この展覧会の関連イベントの一つとして、アニメ「フランダースの犬」で登場したアントワープ大聖堂にあるルーベンス作品を紹介しつつ彼の画業を振り返ることを目的とした美術館講座「ネロの憧れたルーベンスの世界」を開講した。ここでは、講座の準備を通じて考えた事柄を簡単にまとめておきたい。

1975年にフジテレビ系列で放送されたアニメ「フランダースの犬」は、純真な心を持つ主人公の少年ネロが、ルーベンスを記念する絵画コンクールに落選したクリスマスイヴの夜、失意の中で辿り着いたアントワープ大聖堂において、かねてよりずっと見たいと思いつけていたルーベンスの《十字架昇架》(図1)と《十字架降架》(図2)をついに目にするも、寒さに凍えながら愛犬パトラッシュと一緒に息絶えるという、悲しすぎる最終回であまりにも有名である。

物語の中でネロは、いわれない受難を繰り返す。仲良しの女の子アロアの父コゼツからは娘に近づく貧しい少年として疎まれ、大家のハンスからは様々な意地悪をされ続ける。さらには、唯一の肉親である優しい祖父ジェハンを病気で亡くし、放火犯の濡れ衣を着せられて牛乳運びの仕事まで失い、一縷の望みをかけて出品した絵画コンクールにも落選

し、最後にはアントワープ大聖堂の中で死んでしまう。救いのない悲劇としか思えないが、最後にルーベンスの2枚の絵を見たことによって救済が暗示されている。

キリスト教では、キリストが受難の後に十字架上で息絶えることによって、つまりキリストの犠牲の死によって人々が救済されると考える。最後にネロが見た《十字架昇架》と《十字架降架》は、キリスト教美術において、キリストの受難物語のクライマックスにある《磔刑》の前後に位置する主題であり、受難による救済の含意を強く持つ。ネロが《十字架昇架》と《十字架降架》を見て息絶えることによって、キリストの受難とネロの受難が重ね合わせられ、受難による救済が含意されるのだ。

さらにネロが《十字架降架》の前で倒れることも暗示的だ。それは画中に描かれた梯子もまた救済を含意するモチーフだからである。キリスト教では、旧約聖書の創世記28章12節でヤコブが夢に見た、天使が上り下りしている天から地に伸びる梯子(あるいは階段)を「ヤコブの梯子」と呼ぶ。初期キリスト教時代以来、美術の中で繰り返し表現された天と地とを結ぶこの梯子は、救済の梯子として知られる。アニメ「フランダースの犬」では、ラストシーンで天井画の中から天使が舞い降りて来て、ネロとパトラッシュを天国へと連れて行くことで救済がより直接的に示されているが、実は《十字架昇架》と《十字架降架》を見て息絶えたことだけで、受難による救済は含意されていたのである。

## 新収蔵品紹介

## File 10

漆 小松原賢次の技  
福富 幸(主任学芸員)



《卵殻平文蒔絵箱「光雨」》2012年 本館蔵

このたび、倉敷市在住の漆芸作家小松原賢次氏(1943-)より日本伝統工芸展への出品作など約70点の作品と教育素材としての資料類を御寄贈いただきました。

小松原氏は、高校3年生の時、不慮の事故により下半身不随となりましたが、療養生活中に木彫を学び、独立して木彫教室を開きました。山口松太氏(岡山県指定重要無形文化財保持者)の作品展をきっかけに美しい漆芸に魅了され、木彫から漆芸へ転向しました。彫る、という技術的共通点から蒔絵ををはじめ、ついで蒔絵、卵殻、平文、螺鈿とさまざまな技法に取り組み、日本伝統工芸展、同漆芸展、同中国支部展に作品を発表してきました。岡山県は中世より昭和30年代まで「備中漆」と呼ばれる良質な漆を産出しましたが、香川や輪島のような漆器の産地としては発展しませんでした。それ故に、一技法に拘ることなくさまざまな技法を試みるこ

とができたともいえるでしょう。一作家でありながら、実に多くの素材、多様な表現を見ることができる、旺盛なチャレンジ精神、自由さが小松原作品の魅力となっています。

《卵殻平文蒔絵箱「光雨」》は2012年第59回日本伝統工芸展出品作。ガクアジサイの葉を漆黒のシルエットにし、その上に花を卵殻と平文、青紫に光る小さな螺鈿の粒で表し、重ねます。背景のストライプは降り注ぐ雨をイメージし、しっとりと落ち着いた格調高い作品です。また《平棗「みかん」》(2001)はみかんの切り口を平文、卵殻、箔を貼った割貝で表現。乱反射する割貝の輝きが、みかんのさわやかさ、みずみずしさを感じさせます。

岡山ゆかりの漆芸作家は決して多くはありませんが、このたびの寄贈を受け、漆芸表現の可能性に挑む小松原の作品から次に続く作家が出てくることを期待しています。



《平棗「みかん」》2001年 本館蔵

## 展覧会スケジュール

7月  
July

7月14日|金|—8月27日|日|

## 【特別展】

## 傑作 浮世絵 揃い踏み

## —平木コレクション

我が国を代表する浮世絵コレクションのひとつとして知られる「平木コレクション」の優品から重要美術品15点を含む約200点を紹介します。歌川広重の最高傑作とされる保永堂版「東海道五十三次」シリーズ全点をはじめ、菱川師宣・鈴木春信・喜多川歌麿・東洲斎写楽・葛飾北斎ら江戸時代の有名な浮世絵師たちの作品のほか、後に津山藩御用絵師となった北尾政美「浮絵仮名手本忠臣蔵」全11枚など、多彩な作品群で浮世絵の魅力を伝えます。

展覧会期間中、当館学芸員による  
ギャラリートークや美術館講座など  
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。  
<http://okayama-kenbi.info/>

8月  
August

7月15日|土| 14:00~

## 記念講演会 「浮世絵の魅力

## —平木コレクションを中心に—

講師 佐藤光信(公益財団法人平木浮世絵財団常務理事)

会場 2階ホール(先着200名)

8月19日|土| 17:00~

## 音楽の夕べ 「琴と尺八の演奏会」

奏者 尺八:岸本寿男

琴:三上澄美、竹内弘子、平野慶子

会場 屋内広場

9月  
September

9月6日|水|—9月17日|日|

## 第68回岡山県美術展覧会

9月26日|火|—11月5日|日|

## 【岡山の美術展】小田宏子展

9月29日|金|—11月5日|日|

## 【特別展】慈愛の人 良寛—その生涯と書

良寛(1758-1831)は詩歌・書に優れた托鉢僧で、越後(新潟県)出雲崎生まれ。同地を訪れた備中(岡山県)玉島円通寺の国仙和尚に従って同寺に入り、10年余りの修行のち諸国を行脚して帰郷。生涯寺を持たず、名利にとらわれぬ生活を送り、清貧の中ですべての生けるものへの愛を失わず、子供と戯れ、友と語り、和歌を、漢詩を詠み、書に興じた人でした。本展では日本有数の良寛コレクター秘蔵の作品およそ120点からその魅力に迫ります。